震災時に外国人に伝えるべき情報とそのことば

佐藤 和之（弘前大学）
松田 陽子（神戸商科大学）
水野 義道（京都工芸繊維大学）

当プロジェクトの目的

日本経済の強さは、日本から外へという関係だけに留まらず、日本国内に、日本語を母語としない人々を多数受け入れるという、内なる国際化をも意味していた。実際にこのことは、同じ町内の住人として、あるいは隣人として日本語を話せない人々を受容することであった。

かつての、日本社会での常識は、「外国人は英語を話す」であった。しかし、95 年の阪神大震災以来、いわゆる外国人と呼ばれる人々の多くは、地場産業の根幹的部分を担う職種につき、日本語も英語も充分に理解できない人々であったことに私たちは気付いた。また、その収入力と日本の物価水準からすると、震災時には、倒壊や火災などによる被害を受けやすい地区や家屋で生活している人々であることも再認識された。国際都市を標榜していた神戸市であってすら、被災した外国人たちは十分な危険情報や生活情報を受け取ることができないという現実があった。

今日、日本が多くの外国人を受け入れるようになった現状を考えるならば、日本語を十分に話せない人々用の災害にかかわるマニュアル―「どういう情報」を、「どういう手段」で、「どう流す」のかといった、危機管理のためのマニュアルを用意すべき時期に来たと言えよう。本研究はこのようなことから、災害時に日本語以外の言語を使った情報は、どれだけの量で、どこに、どう流されたのか。また外国人被災者たちは、どこから、どうやって必要な情報を入手したのか、不足していたことは何だったのかということについての調査を行う。そしてその結果から、日本語を十分に理解できない人々に対して、災害時には・どのような情報を・どこに・どう流すべきかといった災害情報管理のためのマニュアルを作ろうとするものである。

これまでの経緯

阪神大震災以来、私たちは被災した外国人や外国人対応を行った機関などからの聞き取りを行ってきた。被災外国人が災害発生後にとった典型的な行動は、以下の具体的な事例に集約できそうである。

- 災害直後の情報はマスコミに頼らず、もっぱら近所の日本人や身内、同国籍の友人に求めた
- 教会やボランティア団体が提供する情報に頼った
- テレビやラジオから情報は盛んに流れるが、日本語ばかりで理解できず、家具が散乱する自室に閉じこもっていた
- 新聞からの情報を得るために、毎日何時間も辞書を片手に漢字を調べながら必死で読んだ
- テレビのニュースの画面を見つめて推測しようとした
- 日本語以外での災害情報が少ないことから不安になり帰国した

日本国内に居住する外国人の多くは地震についての経験則がないばかりか、さらにその多くは、日本語にも英語にも精通していない人々であった。そのため、結果的に情報からも隔離される形となっていった。

このような事態に対応すべく、まず、いくつかの民間団体が、外国人相談窓口の設置や震災関連広報を多言語でするなどの支援に立ち上がった。しかし立ち上がりの早いものでも災害発生から 3 日間を要し、本格的に稼働しはじめたのは 1 週間後であった。これは、外国人専用の相談窓口が開設されていることを周知させるのに数日を必要としたためである。

相談内容を整理してみると、住居に関する相談が最も多く、次いで生活環境や税金、労働・就職問題であった。災害時に伝えるべき緊急の情報は、いわゆるクチコミによって伝えられていたことになる。この間の事情については真田（1996）佐藤(1996）松田(1996)が報告をしている。

調査によって得られた結論は、次のようなものであった。

・現代の地域社会への外国人の入り込みは多言語的状況にあり、災害時に複数の言語で情報を流したとしても、言語マイノリティーはそれでも生じる
・日本語が理解できない人々を、情報弱者でなくするためには、その地域構成員にとっての多数言語で情報を流す以外に、さまざまな救援団体が立ち上がるまでの数日間、少なくとも三日間に限っては、外国人のための震災時用の日本語を用いることが効果的である

震災時用の日本語で告知することの有効性を検証した聞き取り実験では、理解の度合いが、「少ししか理解できなかった」から「大体理解できた」へ向上することが、いくつかの言語の複数話者で確かめられている（表 1 参照)。このことに関しては、エレン・陳（1996）ダニエル・姜（1996）の報告が詳しい。

表１　震災時用の日本語を用いることによる理解度の変化
ー ブラジル人（B）とベトナム人（V）による ー

被験者	B1	B2	B3	B4	B5	V1	V2
NHKニュース原文	◉	○	○	○	○	○	?
震災時用の日本語文	●	●	◉	●	◉	●	?

●：大体理解できた　◉：半分理解できた
○：少ししか理解できなかった　？：ほとんど理解できなかった

当論文の目的

標記目的遂行のために、今回、本稿で明らかにすることは、以下の３点である。

①ラジオから流された情報を時間軸に沿って取り出し、情報の種類によって分類する
②それら情報の種類をもとに、外国人にも早急に伝えるべき情報は何かを、災害発生時から時系列で整理する
③それら情報はどのような分か　りやすい表現で伝えられるべきか、震災時用の日本語に仕上げるための造文法を論ずる

ラジオ情報

阪神大震災の例でいえば、被災者の多くは情報をラジオから得ていた(毎日放送 1995, 朝日放送 1995)。朝日放送が尋ねた「ラジオを頼りにした理由（自由回答)」によれば、「テレビより詳しい（地域密着の）情報を流していたので生活に役立った」や、「ラジオでは、配給の行われる場所、時間などがわかり、ラジオを聞いていた人からも情報を得られ役に立った」などの回答が載せられている。このようにラジオは、そのエリアの広狭に合わせて、被災者たちにより密着した情報を詳細に伝えていった。

以下では、ラジオ各局が刊行した地震発生直後からの放送記録（文字化資料）をもとに、ど

のような情報が被災地に流されていったのか、言い換えれば、日本人が求めていた情報を整理することで、外国人にも伝えるべき情報は何なのかを具体的に検討してゆく。ここでの情報は、地震発生から 72 時間を対象としている。これは、日本語が理解できないことで、外国人が情報被災者として取り残される可能性が大きい時間帯は、外国人支援団体が立ち上がるまでの 72 時間内にあると判断したためである。

ABC ラジオでの震災報道は「ああっ、ラジオを聞いていらっしゃる方、えーと、今、激しい揺れがありました。地震がありました。」（午前5時４６分）で始まった。毎日放送では、東京のスタジオからの「いま、５時５０分なんですけどね、ー中略ー　めまいかと思ったら地震ですねって。震度は１と、東京のこの TBS スタジオの震度計に出てますが、お変わりございませんか
？」が、第１報であった。下表は、地震発生から 120 分間に毎日放送が伝えた情報を時系列に並べて示したものである。

表 2　震災発生後２時間のラジオ情報（毎日放送ラジオ）

5:50	TBSニュースデスクから第一報	
	・各地の震度を伝える	⇦震度震源情報
	・火の元注意の呼びかけ	⇦注意喚起情報
6:00	ニュース	
	・各地の震度を報告	
	・震源地を報告	
	・津波の心配はないことを報告	
	・火の元注意の呼びかけ	
	現場中継	
	・各地の震度を報告	
	・震源地を報告	
	・津波情報に注意の呼びかけ	
	・津波の心配はないことを報告	
	・ガスの元栓・火の元注意の呼びかけ	
6:30	・被害状況の報告	この頃から注意喚起情報が増え
	・道路通行止めを報告	見聞き情報が出始める
	・火の元注意を呼びかけ	
	・落下物に注意の呼びかけ	
	・震度・震源を報告	
	・停電を報告	
	・電話自粛の呼びかけ	
	・火災を報告	
	・ガス漏れを報告	
	・新幹線の不通を報告	
	・電話の不通個所を報告	
	・喫煙注意の呼びかけ	
	・被害状況の報告	
	・余震に注意の呼びかけ	
	・火の元注意の呼びかけ	

7:00	報道スタジオ	この頃を境に注意喚起情報は減り
	・震度・震源を報告	見聞き情報が中心になってくる
	・被害状況の報告	
	・フライト情報	
	・識者の分析	
	・火災を報告	
	・消防局からの報告	
	・鉄道情報を報告	
	・被害状況を報告	
7:26	・生き埋めを報告	
	・火気取扱い注意の呼びかけ	
	・ガス漏れ注意の呼びかけ	
	・火災情報を報告	
	・被害状況の報告	
	・各地の震度を報告	
	・鉄道情報を報告	
	・火災情報を報告	
	・死者情報を報告	
7:38	・道路状況を報告	
	・鉄道の損壊を報告	
	・室内物の倒壊注意の呼びかけ	
	・消防局発表の火災情報を報告	
	・被害状況の報告	
	・気象台発表の地震の取りまとめ	
7:57	・道路交通情報	
	・運転自粛の呼びかけ	

情報を整理してゆくと、

① 繰り返される情報があること

② 30 分、60 分と、ある時間帯を区切りとして、情報の種類が変わっていること

に気付く。地震発生後 60 分までは、各地の震度や震源地を知らせる情報、あるいは火の元や落下物、津波、余震に注意といった情報（直後情報と呼ぶ）が繰り返し流されるが、30 分あたりからは、鉄道や道路、あるいは火災といった被害の状況を判断し、以後の自分の行動を推測するための、いわゆる見聞き情報が流され始め、60 分を過ぎたあたりから、その量は急速に多くなっていく。

情報の種類

情報はこのように、いくつかの種類に集約することが可能であり、またさらには、ある情報が流された時間がわかることによって、外国人に対する情報も、その頃を目処に流せるよう、用意しておくことが可能となる。

表 3 は阪神大震災発生後 3 日目までに、ラジオで流された情報を種類別に分類し、それぞれの情報の初出時間を時系列で分布させたものである。縦軸には災害発生からの経過時間を示し、横軸には 6 分類した情報の種類を示した。

これら整理した情報から、外国人にも 72 時間以内に伝えるべき情報は何かを検討し、まずは大きく次の３種類の情報に統合をした。一つ目は「直後情報」と呼ぶべき種類である。「何が起きたのか」「何が起こっているのか」「とりあえずどうすべきか」といった、地震直後に流すべき情報である。二つ目は被災後しばらくしてから流す情報で、たとえば「車を使うな」や「建物の倒壊に気をつけろ」「火の始末に注意」といった、もっぱら二次災害が起きないよう、注意を喚起する情報である。これを「二次災害防止情報」と呼ぶ。三番目は、前の二情報に比べると、順位としては遅くなってから流されるもので、被災住民たちが生活を取り戻し始

表３　震災発生後５７時間の初出情報

災害発生からの経過時間	生活情報	交通情報	支援情報	自然情報	注意喚起情報	外国人関連情報
Jan.17, 0 h				震度震源 津波安全	火災注意 津波注意	
1 h	停　　電 電話制限 電話被害 ガス被害	道路被害 鉄道被害 空路被害	救出活動	浸水被害 余震被害	頭上注意 余震注意 建物被害 道路注意	
2 h	断　　水 営業被害	鉄道安全 海路被害	避難所 被災者			
4 h					デマ注意	
6 h		通行止め	消火活動			
7 h	金　　融 ガス供給停止 営　　業	鉄道運行再開			二次災害注意 避難勧告	
9 h	電気復旧 電話復旧	鉄道復旧			通行注意 ガス漏れ避難勧告	
12h						外国人状況
13h			安　　否 医　　療			
14h	休　　校					
15h	ガス復旧					外国人相談窓口
17h			死者名			

Jan.18,19h	住　　宅	空臨時便				
20h	臨時電話設置		救援物資			
21 h	登校出勤制限					
23 h		鉄道運休				
24 h	給　　水		支援受付			
26 h	給水場所	交通規制				
27 h					鉄塔倒壊避難勧告 ガス漏れ避難解除	
29 h			ボランティア募集			
30 h			住宅提供			
37 h	水道復旧		住宅相談窓口			
Jan.19,43h						
44 h			生活支援			
45 h	無料電話サービス					
46 h						外国人援助依頼
47 h	給水制限					
57 h			ボランティア活動			留学生連絡

（弘前大学人文学部国語学研究室作成）
（毎日放送『阪神大震災の被災者にラジオ放送は何ができたか』Kiss FM Kobe
『勇気と希望をありがとう』）

めた頃に伝えるべき情報である。商店の営業状況や外国語放送の案内、あるいは外国語対応のできる病院の案内、交通案内といった内容の情報である。これを「生活・復旧情報」と呼ぶ。

これら三種の情報が、具体的に伝える内容は次の事柄である。ここでは表３中に示した情報（四字漢語）を分かりやすい表現に言い換えてある。たとえば表中での「震度・震源」は「気象台発表の地震情報」に、また「余震注意」は「余震に注意の呼びかけ」といった具合にである。またここでは、放送に用いる話しことばと掲示物に用いる書きことばの両内容を同時に示してある。

Ⅰ　直後情報
1　気象台発表の地震情報
2　被害状況の報告
3　余震に注意の呼びかけ
4　注意の喚起
・津　波
・火の取り扱い
・ガス漏れ
・電話の自粛
・車使用の自粛
5　交通情報
・一般道路
・高速道路
・通行止め情報
・鉄　道
・航　空
・海上交通
6　余震発生情報
7　津波情報
8　避難場所情報

Ⅱ　二次災害防止情報
1　避難勧告
・ガス漏れ
・建造物の倒壊
・津　波
2　注意の喚起
・デ　マ
・火の始末
・落下物
・崖崩れ
・あわてない

Ⅲ　生活・復旧情報
1　外国語による放送時間の案内
2　外国語による電話情報の案内
3　避難所への案内情報
4　給水情報
5　毛布や食料等の支給情報
6　商店などの営業情報
7　金融機関の情報
8　交通情報
・復旧情報
・不通個所情報
9　外国語のできる病院情報
10　行方不明者の相談所の案内
11　特設公衆電話の案内
12　外国人用相談コーナー設置情報
13　外国語で対応できる災害ホットライン情報
14　留学生への呼びかけ

進行中の課題ー外国人のための震災時用の日本語の表現

これら外国人にも知らせるべき情報は、日本国内で話される主要な言語以外に、震災時用の日本語によっても知らされるべきことは既に述べた。震災時用の日本語は、簡単な日本語が通じる、あるいは日常の会話ができる程度の外国人を想定しての作業が進められており、使われる語も、なるべく 2000 語までで表現できるように考えられている。造文にあたって、検討を重ねてきた規則は次の通り。

・ 一文を短くする
・ 連体修飾節のある複文は避け、できるだけ単文にする
・ 二重否定の表現は避けるようにする
・ 肯定文での表現ができる場合には、できるだけ否定の表現を避けるようにする
・ 程度副詞は、特に強調する必要がある場合を除いて、曖昧さを避けるため、できるだけ使わないようにする
・ キーワードになる分かりやすいことばを、なるべく文の始めに使う

・ 文頭の主題となる部分に、長い連体修飾節を使わないようにする
・ 連用中止で続ける表現は使わないようにする
・ 接続助詞や接続表現などを多用することはできるだけ避ける
・ 文末表現を簡単にする

例 1:～ものとみられます
＞　～でしょう
例 2:～と呼びかけています
＞　～てください

・難度の高い語は、だいたいの意図が通じる程度の表現に言い替える
・場合によっては言い替え以外に、ことばを補って表現する
・カタカナ外来語はわかりにくいので、非常に一般的な場合以外は避ける
・動詞の語幹部分の名詞化したものはわかりにくいことが多いので、できるだけ動詞文にする

例：揺れがあった ＞ 揺れた

・時間が経過し、緊急性が薄れた頃の情報、たとえば「生活・復旧情報」などにおいては、多少難度が高くても、知っておくことが重要と思われる語については、そのまま使い、言い替えのことばを続けて用いる。繰り返し使われることで、その語を学習させる効果がある

例：避難所、みなさんが逃げるところ

これら規則に沿って、たとえば「余震情報」を試作してみると、次のようになる

<<　日本人用ニュース原文（NHK）　>>

気象庁では、今後もしばらく余震が続くうえ、やや規模の大きな余震が起きるおそれもあるとして、地震の揺れで壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、余震に対して十分注意してほしいと呼びかけています。

<<外国人のための震災時用の日本語文（読みことば）>>

これからも▪小さい地震が▪続きます。■地震で▪こわれそうな建物の▪近くには■行かないで▪ください。■大きい窓ガラスの▪近くも▪あぶないです。■家の外では■帽子を▪かぶった方がいいでしょう。

（▪は短めのポーズ、■は長めのポーズを取る箇所）

震災時用の日本語による表現は、ニュースなどに使われる話しことばと掲示物や配布物などに使われる書きことばとの両表現で作成の作業が進められている。それらは今後、非日本語話者によって日本語習得程度の違いによる理解度のテストを行い、読み方や表記の仕方なども整え、できる限り実用に近い形式で公表してゆくよう作業を行っている。

【　引用・参考文献　】

・朝日放送ラジオ局『阪神大震災とラジオ』(1995)朝日放送
・エレン・ナカミズ、陳於華「緊急時における外国人の言語問題とその対策」『言語』25-4(1996)大修館書店
・外国人地震情報センター『阪神大震災と外国人』(1996)明石書店
・桂千佳子「テレビニュース文の構造ー文型抽出のてがかりとして」『平成 7 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』（1995）
・ Kiss FM KOBE『勇気と希望をありがとう』(1995)兵庫ＦＭラジオ放送
・国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』（1984）秀英出版
・佐藤和之「外国人のための災害時のことばー Easy Japanese の提唱とラジオの効用」『言語』25-2(1996)大修館書店
・真田信治「『緊急時言語対策』の研究について」『言語』25-1(1996)大修館書店
・紫垣喜紀「NHK 手話ニュース」マニュアル(1991)NHK 報道局
・消防科学総合センター『地域防災データ総覧』(1994)
・杉原達「阪神大震災と多言語放送」『言語』25-8(1996)大修館書店
・鈴木庸子・横田淳子「テレビニュースを中心とした日本語学習用コースウエアの開発」『日本語教育』76（1992）
・ダニエル・ロング、姜錫祐「外国人における緊急時報道の理解について」『言語』25-5(1996)大修館書店
・毎日放送『阪神大震災の被災者にラジオ放送は何ができたか』（1995）同朋舎版
・松田陽子「多様な外国人に対する情報提供を考える」『言語』25-3（1996)大修館書店
・松田陽子他『外国人住民と地域コミュニティ』(1997)神戸商科大学震災特別研究報告書
・留学生震災文集編集委員会『忘れられない・・・あの日』(1995)神戸大学留学生センター

さとう かずゆき（社 会 言 語 学）
まつだ ようこ
（日本語教育学/社会言語学）
みずの よしみち
（日本語教育学/中国語学）